



AIは道具。人の仕事を“前に進める”力になる。

## AIで進化する印刷業界

### え？このnexTRY、いつもとちょっと雰囲気が違う？

実はこのnexTRY、企画・構成・原稿執筆・表紙ビジュアルに至るまで、かなりの部分をAIの力で制作しています。

最初にChatGPTに「誌面制作をすべてAI技術のみでおこなってみたい」と要望しただけです。

もちろん、最終調整や品質確認は人が行っていますが、記事の内容や作成スピードには大変驚かされました。

印刷業界にとってAIは「脅威」ではなく、「新しい道具」。

人の感性とAIの知見がうまく組み合わせることで、これからの印刷は、もっと面白く、もっと効率的になっていくはずです。

今後も社内外でのAI活用事例を積極的にご紹介していきます。

誌面構成・原稿執筆担当 ChatGPT

表紙・文中写真イメージ担当 Adobe Firefly・Stable Diffusion

### 編集後記

「AIが記事を書いてくれる時代が来たんだねえ」そんな声が社内でもちらほら聞こえるようになってきました。とはいえ、AIはまだまだ“完璧”ではありません。トーンや文脈、ちょっとした言葉のニュアンスは、やっぱり人の感性が大事。でも逆に、“最初の一步”や“広げるきっかけ”としてはかなり頼りになるということが実際にAIを使ってみると実感できます。今回のように、AIと人と一緒につくる誌面。これからいろんな形で試してみたいと思っています！（T）





AIは道具。人の仕事を“前に進める”力になる。

# AIで進化する印刷業界

## クリエイティブの現場で広がる生成AI

「ChatGPTで記事が書けるらしい」

「画像もAIで作れるって本当？」

最近、そんな声をよく聞くようになってきました。

生成AIは、文章の執筆やキャッチコピーの提案、イラスト・写真の生成など、広報誌・チラシ制作の“入口部分”で急速に存在感を増しています。

たとえば：

- ChatGPT(対話型AIサービス)で原稿の下書きや企画案を生成
- Adobe FireflyやStable Diffusion(画像生成AI)で表紙用画像を作成
- Canva(AI機能が搭載されたオンラインデザインツール)でSNS用のテンプレート素材を自動生成

このように、デザイナーや編集者の仕事を奪うのではなく、「たたき台を出してくれる」頼もしいパートナーとして活用され始めているのです。

一方で、AIの出力は“完璧”ではありません。語調の調整、誤情報の修正、印刷ルールへの対応など、最終的な仕上げは人の目と手が不可欠。

AIと人が役割を分担することで、企画から入稿までのスピードと品質を両立できる時代がすぐそこまで来ています。

### ChatGPT(チャットジーピーティー)

対話形式で文章の作成や要約、企画提案などを行ってくれる生成AI。質問に答えたり、原稿のたたき台を作ったりと、文章まわりの仕事を幅広くサポートします。

### Adobe Firefly(アドビ・ファイアフライ)

「○○の風景」など文字で指示するだけで、写真風やイラスト風の画像を生成できるAIツール。商用利用も可能で、表紙ビジュアルや背景素材づくりに活躍します。

### Stable Diffusion(ステーブル・ディフュージョン)

オープンソースの画像生成AI。キーワードを入力するだけで、写真風やイラスト風の画像を自在に作成できます。自前の画像スタイルに合わせた学習も可能。

### Canva(キャンバ)

テンプレートを使って簡単にチラシ・バナー・SNS投稿などを作成できるクラウド型デザインツール。最近はAI機能も搭載され、画像生成や文章の下書きにも対応。

## 印刷工場も“自律化”の時代へ

印刷業界では今、AIの力を活用して「印刷機そのものが考え、動く」時代が始まっています。

印刷機が過去の膨大な作業データを学習し、最適な設定を自ら導き出す。印刷中は振動や温度、色味などの微細な変化を感知して、自動で調整や補正を行う。

機械が自ら判断し、止まることなく動き続ける——。

そんな“考える印刷機”によって、工場の安定稼働と品質維持が一段と進出し始めています。

人が完全にいらなくなるわけではありませんが、「印刷機に任せられること」が着実に増えてきている。それが、いま現実に行進している印刷現場のAI化です。



## 営業・販促の仕事にもAIの力

顧客への提案書やSNS投稿、キャンペーン企画。

こうした営業・販促業務でも、AIが頼れる右腕として活躍しています。

たとえば、過去の受注データから「次に勤める商品」をAIが提案したり、営業メールやチラシ原稿のたたき台を自動生成したり。一人ひとりに合わせたアプローチを素早く行えるようになります。

“考えて書く”時間を、もっと“伝える”時間へ。

営業現場にも、AIの恩恵が確実に広がっています。

